大手前大学論集　第14号（2013）pp.17－30

ゼバスティアン・ブラント『阿呆船』序詩に関する語学的考察(3)

大　島　浩　英

要　旨

本稿では、これまで行ってきたSebastian Brantによる15世紀末の風刺詩集Das Narrenschiff（『阿呆船』）の序詩に関する語学的考察を、その最終行まで進めていくことにする。対象となっているテキストは1494年発行のものであるため初期新高地ドイツ語で書かれている。したがってそれ以前の中世高地ドイツ語と、それ以後の現代語に近い新高地ドイツ語の両方の言語的特徴がこのテキスト内には混在している。

長母音から二重母音への変化、舌の位置が下がることによる母音の変質、頻繁に起こる語末音の消失など音韻面での変化、書記法の揺れによる使い分け、また動詞、形容詞の変化語尾の不統一性、さらには枠構造、副文内での定動詞後置などに関する不完全な統語法といったこの時期特有の言語現象が本稿でも見られ、これらの特徴を、中世高地ドイツ語、新高地ドイツ語、そして現代ドイツ語との関係において考察した。

キーワード：初期新高ドイツ語、ゼバスティアン・ブラント、阿呆船、風刺文学、ドイツ語学

はじめに

15世紀末のヨーロッパ。そのドイツ語圏社会の乱れた世相をローマ・カトリックの立場から風刺し、戒めるために書かれたのがSebastian Brantによる風刺詩集Das Narrenschiff（『阿呆船』）である。この詩集では112の詩の中で様々なタイプの阿呆が描かれる。これらすべての愚者を満載して阿呆の国へ向かうのが阿呆船（Narrenschiff）である。原則的に二行一組で脚韻を踏む形式（Paarreim）で書かれた序詩のうち、前回の拙稿では45行目から89行目 „So vil narren zůsamen bracht“（「たいそう多くの阿呆を

集めるのには」）までを扱ったため、本稿ではこれに続く90行目から最終行の136行目までを対象としてこれらの詩行を、中世高地ドイツ語、新高地ドイツ語、現代ドイツ語と比較、分析しながら語学的考察を行う。なお、原文には５行ごとに行数を付し、和訳に際しては韻律に関係なくできるだけ逐語訳を行った。

使用テキスト
原文：
Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Studienausgabe. Hg. von Joachim Knape. Stuttgart 2005.（Reclams Universal-Bibliothek Nr. 18333）S.109 f.
現代語訳：
Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Übtrg. von H. A. Junghans. Stuttgart 1964. Bibliographisch ergänzte Ausgabe 1992.（Universal-Bibliothek Nr. 899）S.8 ff.
上記および次の各テキストに付された注釈を適宜参考にした。
Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Hg. von Felix Bobertag. Berlin u. Stuttgart 1889.（Deutsche National-Litteratur. hg. von Joseph Kürschner, Bd. 16）S.7 f.
Zarncke, Friedrich: Sebastian Brants Narrenschiff. Leipzig 1854.（Hildesheim 1961）S.298 f.
略語：mhd. 中（世）高（地）ドイツ語、frnhd. 初期新高（地）ドイツ語、nhd. 新高（地）ドイツ語、lat. ラテン語

I

原文		現代語訳
Jch hab ettwan gewacht zů nacht	90	Gar oft hab ich gewacht die Nacht,
Do die schlyeffent der jch gedacht		Die schliefen, deren ich gedacht,

私は夜にたいてい起きていた
私が思い描いている者たちが眠っていたその夜に

ここでは現在完了の時制が用いられているが、押韻との関係で完了の助動詞habに対応する過去分詞が文末に配置されておらず、枠構造が不完全であると言える。ettwanについてはGrimmのetwanに „aliquando（=zuweilen, manchmal「時おり」）, olim（=gewöhnlich「たいてい」）“ という両方の意味がラテン語で説明されており、またLexerのetewaではgar、ziemlich、sehrといった強調の意味もあるため、ここではgewöhnlich（たいてい）、あるいは現代語訳のgar oft（頻繁に）の意味が妥当と思われる。

91行目文頭のdoは関係副詞として90行目のnachtを受けているが、現代語の関係副詞woに対してFrnhd. ではdaがよく用いられることが知られている[1)]。そしてこの関係文中のdieは後続の関係代名詞に対応する先行詞で、「その人たち」を表す指示代名詞diejenigenと考えられ、このdiejenigenを受けて定関係代名詞derが現れているが、これは複数２格であるため現代語ではderenとなり語尾enが付加される。

定動詞のschlyeffentはBobertagのテキストにはschleiffentとも記述されており、３人称複数過去形で語尾にｔが付いているが、このｔは本来sindのｄのようにMhd. では現在の人称変化でのみ付加されるものである。この行ではこの用法が過去の人称変化語尾にも転用されたものと思われる。

ここでは、89行目のbracht、90行目のnachtと91行目文末のgedachtとの３行で脚韻を踏む。なおgedachtでは、押韻のため語末のｅが消失している。

Oder villicht by spyl vnd win	Oder saßen vielleicht bei Spiel und Wein,
Sassent / vnd wenig dochtent myn /	Wo sie wenig gedachten mein;

あるいは恐らく腰を据えて遊びやワインに打ち興じ
私のことなどほとんど意に介さず

この行ではvillicht=nhd. vielleicht、by=nhd. bei（mhd. bi）、win=nhd. Weinなどに現代語との間で二重母音化が見られ、またspyl=nhd. Spiel（mhd. spil）では長音化が見られる。

sassentはfrnhd. sitzenの３人称複数過去形の語尾にｔが付加されたものだが、これは91行目と同様、本来は現在の人称変化でのみ現れる現象が過去の人称変化語尾にも転用されたものと考えられ、この現象はdochtent（<mhd. denken）にも見られる。

myn（<mhd. min）はdochtentの２格目的語で現代語ではmeinerとなるが、このテキストではまだ二重母音化していない。denkenが２格目的語をとる用法は現代語でも雅語として残っている。各文末のwinとmynとで脚韻を踏んでいる。

Eyn teyl jn schlitten umbher fůren		Ein Teil in Schlitten fuhr umher
Jm schne / das sie wol halb erfrůren	95	Im Schnee, wo sie gefroren sehr;

ある者たちはそりに乗ってあちこちを走り回る
ほとんど凍え死にそうな雪の中で

eyn、teylのｙは現代語ではein、Teilとｉで表記されるが、ｙは14世紀以来用いられるようになり、この例のようにeyなどの二重母音で多く見られる。teylに続く「～の中に」を表すjnなどは二重母音ではないためｙで表記されていない。また、umbherの前半

umbはmhd. umbeに由来し、語源的にはum＋beiで本来は空間的意味を表すものである。

94行目のfůrenは３人称複数の人称変化形であるため、単数の主語Eyn teyl（一部）を、これに含まれるNarren（阿呆たち）の意味で複数としてとらえた変化をしている。なおここでは、３人称複数現在形に付くｔが付加されておらず、同様のことが95行目のerfrůrenについても言える。また、この定動詞は第２位ではなく押韻のため文末に置かれている。

95行目のdasは現代語のwoに対応し、schneを受けて場所を表す関係副詞として機能しているものと思われる。fůrenとerfrůrenとで脚韻を踏む。

Eyn teyl vff kalbß fůss gingen sust /	Ein Teil trieb Kindereien just;
Die andern rechten jr verlust	Die andern schätzten den Verlust,
子供じみた振る舞いばかりする者もいる	
他の者たちは自分の損失をそろばん勘定	

96行目は本来「一部の阿呆たちは、まさに子牛の足取りで歩く」といった意味になるが、現代語のKalbにも「ばか者、子供っぽい人」という比喩的な意味があるように、ここでは阿呆たちの愚行が、子牛たちの浮かれ騒ぎ（ausgelassenheit der kälber）として表現されている。またZarnckeはこの表現に対し、„er ist entnommen von dem gezierten gange der jungen stutzer“（「若い洒落男の気取った足取り」）という説明をも加えている。なおKnapeはこのテキストに „wie unreife Kälber“（「未熟な若者」）という注釈を入れ、Junghansの現代語訳でも „kälberten wie die Kinder“（「子供のようにふざける」）という説明を加えている。また、fůssには複数を表す語尾のｅが消失している。

gingenについては３人称複数過去の人称変化形で表示されており、これは94行目と同様に単数のEyn teyl（一部）を複数扱いしているものと考えられる。

97行目のrechtenはrechnetenが省略された形であるが、Zarnckeによると、Brantはrechnenと並んでrechenを多用し、他にもsegenenと並んでsegenも用いるという記述があり、ｎの脱落傾向が見られる。

次にverlustについてはMhd. で女性名詞であったものが現代語では男性名詞に変化している。Frnhd. の時期では男性名詞とされるが、verlustの前の所有代名詞jr（彼らの）がmhd. irと同様に無語尾であるため、性別と格が不明確な表記になっている。ここでは現代語のsonstに対応するsustとverlustで脚韻を踏んでいる。

Den sie den tag hetten gehan
Vnd was jnn gewyns dar vß möcht gan
その日に彼らが被った（損失）を
そしてどんな利益がそこから得られるか

Der sie desselben Tags betroffen,
Und welchen Gewinn sie könnten hoffen,

Denは97行目のverlustを受ける４格の関係代名詞であるため、ここでverlustが男性名詞であることがわかる。次にhettenはhan（=nhd. haben「持っている」）の３人称複数の接続法過去と考えられるが、Frnhd. ではhanの過去形にhateと並んでhetがあり直説法と接続法が区別できないため[2]、この箇所の場合も直説法過去の可能性を考えることができるかもしれない。そしてこの現在完了の助動詞に対応する過去分詞がgehanという形をとっているが、この他にもFrnhd. にはgehabt、gehaben、gehebtなどの語形があり一定していない。なお、語順については韻律の関係でgehan hettenのように定動詞が文末には置かれていない。

99行目の男性名詞の２格gewynsはこの場合wasにかかっていると思われ、「利益の何が」、つまり「どんな利益が」という意味の主語を表している。jnnはnhd. ihnenに対応する３人称複数３格の人称代名詞で、語中のｅが脱落した形で現れている。また、dar vßのdaは97行目のverlustを受けていると思われ、これと文末のganとを組み合わせて„hervorgehen“（「出て来る、生じる」）という意味を表していると考えられる。なお、möcht（<mhd. mugen, mügen）は語末音ｅが消失した接続法過去形で「可能」（vermögen）の意味合いを表現している。gehan、ganとで脚韻を踏む。

Ⅱ

Oder wie sie morn wolten liegen
Mit gschwätz / verkouffen / manchen
[triegen
あるいは明日、どうやって嘘をつこうか
口車に乗せてどのように売りつけようか、どうやって多くの人をだまそうか

Oder wie sie morgen wollten lügen
Mit Geschwätz, verkaufen, und manchen
[betrügen.

現代語で「明日」を表すmorgenがここではmornという語形に縮約されており、この語についてはfrnhd. moren、mhd. morneなどの形も見られる。

liegenはこの場合、「嘘をつく」という意味のmhd. liegen, liugenがそのままの形で使われたもので、現代語では母音がie→üのように円唇化し、lügenという円唇母音で定着している。これと同様のことが101行目のtriegenについても言え、現代語ではtrügenと

なりie→üと母音が変化している。また、母音の変化についてはverkouffenにも見られ、Nhd. ではverkaufenとなりouからauへと舌の位置が下がった二重母音へと変化していく。liegen、triegenで脚韻を踏む。

Den selben noch zů dencken all
Wie mir jr wys / wort / werck / gefall
それらすべてをよく考えるために
彼らのそんなやり方はいかがなものかと

Um diesen nachzudenken allen,
Wie mir solch Art, Wort, Werk gefallen,

noch zů denkenについてはBobertagにnachdenkenという説明があり、この前綴りnachとの関係で文頭のden selbenという３人称複数３格の目的語が現れているものと思われる。このような３格目的語をとる用法は雅語として現代語にも残っている。

jr wys（=nhd. ihre Weise）ではいずれの語にも語末のｅが消失しており、またwysにはWeiseへと二重母音化する前の形が見られる。またKnapeの注釈にはihre Art und Weise（「彼らのやり方、方法」）という説明があり、この中にwort（「言葉」）、werck（「行動」）をも含めて、「彼らのやり方が私にとってどのくらい受け入れられるものなのか」といった意味の表現がここではなされているように思われる。なお、後置された定動詞gefallでは３人称複数１格の人称変化語尾enが脱落して押韻が可能となっている。ここではallとgefallで脚韻を踏む。

Jst wunder nit / ob ich schon offt
Do mit myn gdicht nit würd gestrofft　105
Gewacht hab / so eß nyeman hofft
それは不思議なことではない、幾度もすでに
自分の詩が非難されないように
寝ずに考えたとしたら、たとえそれを誰も期待しなくとも

Hab ich, kein Wunder ists, gar oft
Gewacht, wann niemand es gehofft,
Damit man tadle nicht mein Werk.

104行目の従属接続詞obに対してBobertagはwenn、daßという説明を加えており、接続詞において意味のずれが見られる。またdo mit（=nhd. damit）という従属接続詞では現代語と比べてdoからda、分かち書きから一語書きへといった変化が見られ、またmyn→nhd. meinへの二重母音化も確認できる。

105行目のgestrofftはfrnhd. straffen（nhd. strafen）（「罰する、非難する」）の過去分詞と考えられ[3]、助動詞würdと組み合わせて受動表現が行われている。なおこの場合、押韻のため定動詞が副文内で後置されていない。

106行目のsoはこの場合、dochを伴ってはいないが「たとえ～でも」という認容を表現する従属接続詞と読める。また、ｓを重ね書きしたeß（=nhd. es)、nyemanでは、nhd. niemandのように語末のn, sの後に付くt（d）が付加される前の形が現れている。ここではofft、gestrofft、hofftの３行で押韻している。

Jn disen spiegel sollen schowen	In diesen Spiegel sollen schauen
All gschlecht der menschen man vnd frowen	Die Menschen alle, Männer, Frauen;
この鏡の中を覗き込んでもらいたい	
男も女もすべての人間は	

前述のようにschowen、frowenにおいて、nhd. schauen, Frauenのように二重母音auへと舌の位置が下がる前の段階の形がここにも見られる。また、gschlechtではｇの後にｅ音が語中音消失している。

次にmanはこの場合「男」という意味で男性名詞の複数として用いられているが、このmanはMhd. のように不定代名詞のmanと同形であるため形態的にはこれらを区別することは困難である。現代語では男性名詞Mann「男」と不定代名詞man「人」が語形で区別されているため、Mannの複数形についてはMännerという強変化が16世紀末頃に定着したが、Mannenという複数形も「家臣」という意味の雅語で現存している[4)]。

また書記法に関してはBobertagのテキストにmēschē（=menschen), vn̄（=vnd), frowē（=frowen）といった表記も見られる。schowen、frowenで脚韻を踏んでいる。

Je eyns ich by dem andern meyn		Die einen mit den andern ich mein':
Die man sint narren nit allein	110	Die Männer sind nicht Narrn allein,
男性でも女性でも同じこと		
男だけが阿呆ではない		

109行目のbyにはnhd. beiのように二重母音化する前の形が見られ、またmeynには１人称単数現在の人称変化語尾ｅが脱落している。

この行についてBobertagのテキストには „jeden von beiden“ という注釈が付けられ、男性と女性の両方という説明が加えられているが、Zarnckeではeynsという中性の代名詞をGeschlecht（性）と関連付けるのではなく、中性のmenschとの関係で解釈している。中性名詞として用いられたMenschには「あばずれ女」のように女性を蔑んだ意味があるが、17世紀では中性のmenschは女性に限定して用いられてはいたものの、女性を蔑んだ意味で用いられることはなかった。したがって中性のmenschは、ここでは両方の

性を含んだ「人」としての意味で使用されているものと思われる。また、人を表す不定代名詞では一般にeinerが用いられるが、Bobertagでは中性のeinsも非常に一般的に用いられていたと解説されている。

110行目のdie manは現代語のdie Männerに対応する複数形だが、前述のようにここではmhd. manと同様に複数でも無変化のままである。またこれに続く定動詞sintは現代語のsindに対応するものだが、３人称複数現在の人称変化で語尾に付くのはｔであるため、この語形はsin＋ｔ（<mhd. sint）という本来の形であると言える。さらにこの詩の19行目にはsindt、128行目にはsyndtという語形も見られる。ここでは語尾のｅが脱落したmeynとalleinとで脚韻を踏んでいる。

Sunder[5] findt man ouch nårrin[e] vil	Man findet auch *Närrinnen* viel,
Den ich die schleyer / sturtz vnd wile	Denen ich Kopftuch, Schleier und Wil
そうではなくて阿呆女も多く見かける	
そんな彼女たちに私はベールを	

111行目のfindtでは、現代語のようにｄの後に人称変化語尾ｔを付加する際に挿入されるｅが省略されている。またここでもouchにおいてauに変化する前のouという二重母音が見られる。nårrinについてはここでは複数形で用いられていると思われるがnhd. Närinnenのように、女性形複数の語尾nenが付加されていない。また、denは複数３格の定関係代名詞であるが、Frnhd. にはden / denenの２つの形式があるため、男性４格との区別がつかない。

次にZarnckeによると、sturtzとはeigentlicher trauerschleier（「本来は喪のベール」）、またwile（<lat. velum）に対してはganz besonders der nonnenschleier（「特に尼僧のベール」）という説明がそれぞれあり、後者には、尼僧という聖職者の中にも阿呆がいるという風刺が込められているようにも思われる。この２行では、vilとwileで脚韻が不完全である。

Mit narren kappen hie bedeck	Mit Narrenkappen hier bedecke.
Metzen[6] hant ouch an narren rock[e]	Auch Mädchen haben Narrenröcke;
阿呆ずきんといっしょにここでかぶせてあげましょう	
尻軽娘もまた阿呆の上着を身に付けている	

現代語のbedeckenに対応するbedeckについては、１人称単数現在の人称変化語尾ｅが脱落しているが、現代語のbedeckenは「覆う」対象を４格目的語とし、mit ～の前置

詞句が覆う手段（道具）を表して、「～でもって４格目的語を覆う」と使用される。それに対して原文では、覆うための手段を４格目的語にとり、覆う対象が３格で表現されている。したがってここでは、前綴りbe-による目的語の選択機能が現代語とは異なっていると考えられる。

またhantにおいてはfrnhd. hanの３人称複数現在形で語尾にｔをとっており、そして後続のanと関係してhant ～ anで「～を身に付けている（nhd. anhaben)」という意味が表現されている。bedeck、rȯckで脚韻を踏む。

Ⅲ

Sie wellen yetz tragen on das	115	Sie wollen jetzt tragen offenbar,
Was ettwan mannen schȧntlich was /		Was sonst für Männer schändlich war:
彼女たちは今ではそんなものでも着ている		
男にとってさえも恥ずべきものを		

115行目のonは、前行のanと同様に副詞でtragenと組み合わせて「～を着ている」という意味を表現しており、またanとonという異なる形が併存していることで母音の不安定さが見てとれる。

wasは前行の先行詞dasを受ける不定関係代名詞で、この関係文中の複数３格のmannenについては、108、110行目のmanと同様にここでもMännernという強変化をせず、古い弱変化の形式で表記されている。また、関係文内で後置されたmhd. sinの３人称単数過去形wasはwarという形でも併存しているが、これらはFrnhd. の時代にwarへと平均化され現代語に至っている。ここではdasとwasで脚韻を踏む。

Spitz schů / vnd vßgeschnytten rȯck	Spitze Schuh' und ausgeschnittne Röcke,
Das man den milchmerck nit bedeck	Daß man den Milchmarkt nicht bedecke;
尖った靴[7]に襟が大きく開いた上着	
その結果（そのため）豊かな胸を隠せない	

117行目では、形容詞spitz、vßgeschnyttenの格変化語尾、名詞rȯckの複数形語尾、また118行目では動詞bedeckの人称変化語尾（３人称単数接続法現在）のすべてについて、それぞれの機能とは無関係に語末音のｅが消失している。

次に、118行目のdasは現代語のso dassに対応し、この場合は結果の意味を表しているものと思われる。また語末にｔが脱落しているmilchmerckは「ミルク市場」といっ

た意味になるが、この語についてはKnapeによる „Busen“ という説明からもわかるように、襟が大きく開いた上着から見える女性の豊かな胸を茶化した表現であると言える。rock、bedeckで脚韻を踏む。

Wicklen vil hudlen jn die zopff		Sie wickeln viel Lappen in die Zöpfe
Groß horner machen vff die kopff	120	Und machen Hörner auf die Köpfe,

（お下げ）髪にたくさんの布切れを巻き込んで
彼女たちは大きな角を頭に生やしている

ここでも名詞zopff、kopffで複数形の語尾ｅ、großで形容詞の格変化語尾ｅがそれぞれ脱落している。また現代語の前置詞inに対応する語について、この序詩の中にはinが３例、jnが５例、jmが１例、jnnが１例、jnn̄が１例の語形が見つかり、ｉとｊの書記法が併存している中でｊが優勢であると言えるが、しかし両者に何らかの機能的な使い分けがなされているようには思えない。

また120行目のmachenについて、本来は „machen sie“ を表すmachensとすべきではないかという指摘をZarnckeは行っており、さらにGroß hornerに関して、頭（髪）を角のようにする流行はすでに古くからあり、当時においてその流行はかなり広がっていたという説明も加えている。ここではzopff、kopffで脚韻を踏んでいる。

Als ob es wer ein grosser stier	Als käm daher ein mächtger Stier;
Sie gand har wie die wilden thier /	Sie gehen umher wie die wilden Tier'.

まるで大きな雄牛のように
彼女たちは野獣のごとくやってくる

ここではals obに導かれる副文内で定動詞のwer（mhd. sinの接続法過去）が後置されていない。また、前行のgroßでは脱落していた形容詞の格変化語尾について、この行ではgrosser stierというようにgrossに変化語尾erが付加されており、ここでは形容詞語尾による性、数、格の表示機能がまだ未整備な状態にあると考えられる。

gandに関しては、Frnhd. の時代では幹母音にａとｅが併存しており、この例は幹母音がａからｅへ移行する中間的な段階にあるものと考えられる。また人称変化語尾については、３人称複数現在の語尾に付加されるｔがここではsindのようにｄで表記され、人称変化語尾の表記にも揺れが見られる。stier、thierで脚韻を踏む。

Doch sollen erber frowen mir	Doch sollen ehrbare Frauen mir schenken
Verzyhen / dann̄ ich gantz nit jr	Verzeihung, denn ihrer will ich gedenken

しかし尊敬すべき淑女の方々は
私をお許しくだされ。なぜなら私は女性たちに

ここではverzyhenにおいて、nhd. verzeihenのようにｙからeiへの二重母音化が起こる前の語形が見られる。また、dann̄の横線についてはmhd. danneに由来し[8]、後続のｅを省略したものか、あるいは単に余剰表記かいずれかの可能性があるように思われる。

jrは３人称複数２格でgedenckenの目的語として用いられているが、この形態の他にもihrer、ihren、ihres、ihroという語形もFrnhd. には併存している[9]。mirとjrとで脚韻を踏む。

Gedencken zů keym argen wyl	125	Wie billig in keiner argen Art;
Den bo̊sen ist doch nit zů vil		Den bösen aber sei nichts erspart,

悪意を抱いてはおりません
しかし悪人どもに対しては、やり過ぎるということなどない

125行目のkeym、wylはそれぞれnhd. keinem, Willeと考えられ、つまり現代語の語形で示すと、„zu keinem argen Willen“（「悪意なしに」）と書き換えられる。また126行目では、nit（=nhd. nichts）が主語、den bo̊senは「人々」が省略された形容詞の名詞化で複数３格として、「悪人にとっては何事も多すぎるということはない＝容赦しない」という表現になる。ここではwyl、vilで押韻している。

Ⅳ

Der selben man ein teil hie fyndt	Von denen man ein Teil hier find't,
Die jnn̄ dem narren schiff ouch syndt	Die auch im Narrenschiffe sind.

彼らの一味はここにも見かけられる
連中は阿呆船にも乗っている

der selbenのderは、前行のden bo̊sen（悪人たち）を受ける定関係代名詞の複数２格でein teil（94行目ではeyn teyl）にかかると考えられるが、現代語に見られる語尾enがまだ付加されていない。そしてこの関係文の中では定動詞fyndtが後置されており、また128行目では、den bo̊sen（悪人たち）を受ける定関係代名詞複数１格のdieに導かれ

る関係文においても定動詞syndtの後置が行われており、これらの詩行においては現代語の文法的枠組みに近づいているものと思われる。それぞれ後置された定動詞のfyndtとsyndtとで脚韻を踏んでいる。

Dar vmb mit flyß sich yedes sůch		Darum mit Fleiß sich jeder suche,
Fyndt eß sich nit jn dysem bůch	130	Und findet er sich nicht im Buche,

それゆえ、努めて皆が自分自身を探してほしい
もしこの本の中に自分の姿が見つからないときは

ここでも母音変化に関してflyß→nhd. Fleißというｙからeiへの二重母音化が見られる。不定代名詞jedesについては、この場合は「人」を表し「誰でも」という意味で用いられているが、jederではなくjedesと中性形になっており、また109行目でも「人」を表す際に中性形のeynsが現れていることから、このテキストでは性別を越えた中性形で「人」を表現する傾向が見られる。そしてこのことは130行目のeß「それ」についても言え、erは用いられていない。sůch、bůchで脚韻を踏む。

So mag es sprechen / das es sy	So mag er sprechen, daß er sei
Der kappen vnd des kolben fry	Der Kappe und des Kolbens frei.

それなら申し出るがよい
自分には頭巾もこん棒もないと

131行目のesは前述のように２箇所とも「人」を中性形で表現したものと考えられる。また母音変化に関しては、接続法現在のsy（=nhd. sei）、次行のfry（=nhd. frei）ともに、二重母音化前の語形がここにも見られる。des kolbenについては、弱変化して２格語尾のｎをとっており、現代語のdes Kolbensように強変化するには至っていない。そしてこのこん棒（kolbe）に対してJunghansは、阿呆のしるし（Insignien des Narren）という説明を加えており、鈴のついた阿呆ずきんと並んでこん棒もまた阿呆に象徴的な存在であることがわかる。ここではsyとfryとで脚韻を踏んでいる。

Meint yemant das jch jnn nit růr	Wer meint, daß ich ihn nicht berühre,
Der gang zůn wysen fůr die thůr	Geh zu den Weisen vor die Türe,

自分については言及されていないと誰かが思っているならば、
賢者の戸口へ行きなさい

不定代名詞yemantではnhd. jemandのようにすでに語尾にｔが付加（t-Epithese[10]）されているが、106行目の不定代名詞nyemanにはまだこの語尾がなく、両方の語形がこのテキストにおいて併存している。

gangについてはfrnhd. ganの２人称単数の命令形であるため主語は不要だが、ここでは３人称主語の指示代名詞derが添えられた状態で用いられている。この場合は３人称derに対する命令として、定動詞を接続法現在の形式にするのが妥当であろう[11]。また、zůn=zů den、125行目のkeym=keynemのように、現代語にはない省略形も見られる。

なお、für die thür, vor der thür（扉の前へ、に）についてZarnckeは、これらの表現がhinaus（外へ）、draussen（外で）を示すまったく一般的な表現であるという説明を加えている。růr、thůrで脚韻を踏む。

Vnd lyd sich / vnd sy gůter dyng	135	Gedulde sich, sei guter Dinge,
Byß ich ein kapp von Franckfurt bryng		Bis ich ˙ne Kappe von Frankfurt bringe!

そして辛抱されよ、機嫌よく
私が（阿呆）頭巾をフランクフルトから持ち帰るまで

lyd sichについては、Mhd. のlidenにも同様に再帰用法が認められるが、Nhd. のleidenにはこの用法は見られない。またこの語においても現代語では母音がeiと二重母音化する。136行目のeinは不定冠詞の女性単数４格であるが現代語のように語尾にｅが付加されておらず、これはMhd. にも言えることであって、不定冠詞の語形からは性と格を見分けにくい。

最後にvon Franckfurt bryngという表現については、Knape、Junghansともに „von der Frankfurter Messe“（「フランクフルトの見本市から」）という注釈を加えている。Zarnckeによれば、Frankfurt、Nördlingen、LeipzigのMessen（見本市）は15、16世紀では最も有名な見本市との記述があり、フランクフルトは阿呆ずきんでさえも手に入れることのできる、最も説得力のある都市として当時の人々には受け入れられたのであろう。ここでは、複数の語尾ｅが脱落したdyngと、現代語の語順のように副文内で後置された定動詞bryngとで脚韻を踏んでいる。

Sebastian Brantの風刺詩集『阿呆船』の冒頭に付された序詩は、136行目で終わっている。この序詩に関してこれまで個別に行ってきた語学的考察を踏まえた上で、序詩全体から言える語学的特徴についての考察は、今後稿を改めて深めていきたい。

注：

1）工藤康弘・藤代幸一著『初期新高ドイツ語』大学書林　1992年、110頁。
2）工藤康弘・藤代幸一　前掲書、96頁。
3）getadelt（Bobertag）（「とがめられる」）。
4）三好助三郎著『新独英比較文法』郁文堂　1981年、57頁。
5）nhd. sondern. 110行目のnit alleinと111行目のsunder～ouchで、現代語のnicht nur A, sondern auch B（「Aだけではなく Bも」）に対応。
6）Metzen: verächtlich für Mädchen（Bobertag）（「若い女性に対する侮蔑」）、mädchen niedern standes（Lexer）（「身分の低い小娘」）。
7）先の尖った靴に対してライプツィッヒ大学の評議会は、1463年に禁止令を公布したとZarnckeの注釈には述べられている。
8）mhd.danneはこの場合、原因、理由を表すweil（「～だから、なので」）の意味と考えられる。
9）工藤康弘・藤代幸一　前掲書、69頁。
10）工藤康弘・藤代幸一　前掲書、57頁。
11）Mhd. の接続法現在ではge, ga

上記以外の参考文献：

Baufeld, Christa: Kleines frühneuhochdeutsches Wörterbuch. Tübingen 1996.
Ebert/Reichmann / Solms / Wegera: Frühneuhochdeutsche Grammatik. Tübingen 1993.
Gärtner, Kurt / Steinhoff, Hans-Hugo: Minimalgrammatik zur Arbeit mit mittelhochdeutschen Texten. 2. Aufl. Göppingen 1977.
Götze, Alfred: Frühneuhochdeutsches Glossar. 7. Aufl. Berlin 1967.
Grimm, J. / Grimm, W.: Deutsches Wörterbuch. 33 Bde. Leipzig 1854 – 1971.（dtv 5945）
Langenscheidts Handwörterbuch. Lateinisch-Deutsch. Berlin / München 1983.
Lexer, Matthias: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. 38. Aufl. Stuttgart 1992.
Paul, Hermann: Deutsches Wörtetbuch. 10. Aufl. Tübingen 2002.
Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Hg. von Heinz-Joachim Fischer. Wiesbaden 2007.
Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Hg. von Manfred Lemmer. 3 ., erw. Aufl. Tübingen 1986.（Neudrucke deutscher Literaturwerke, N. F., Bd. 5 ）S. 4 f.
伊東泰治・馬場勝弥・小栗友一・松浦順子・有川貫太郎編『新訂・中高ドイツ語小辞典』同学社　2001年
S. ブラント著　尾崎盛景訳『阿呆船（上）・（下）』現代思潮社　1968年
古賀充洋編『中高ドイツ語辞典』大学書林　2011年
相良守峯著『ドイツ語学概論』博友社　1965年
下宮忠雄編著『ドイツ語語源小辞典』同学社　1992年
田中秀央編『羅和辞典（増補新版）』研究社　1966年
山口四郎著『ドイツ韻律論』三修社　1973年